シモーヌ・ヴェイユの祈り——其苦の源泉——

松 原 詩 乃

Lecture de l'«Exemple de prière» — Source de la compassion chez Simone Weil —

Shino MATSUBARA

Dans l'«Exemple de prière» il s'agit avant tout de se nier soi-même. La prière consiste dans le fait que nous reconnaissons comme un simple fragment de la matière inerte dont est faite la création. L'homme entant que chose signifie notre fragilité face à la nécessité d'ici-bas. Nous sommes nus, exposés à tous les coups. «Mon Dieu, mon Dieu, pourquoi m'as-tu abandonné?» Dieu est absent dans ce monde.

La prière supplie donc Dieu de se rendre la chose dont le moteur est le Christ. C'est une chose qui peut éprouver sans horreur la compassion devant un malheureux.

Nous sommes forts avec Dieu, et fragiles en l'absence de Dieu. Mais la compassion suppose les deux à la fois. Il faut aimer aussi notre fragilité. Pour Simone Weil, la prière, c'est la louange de Dieu à travers notre misère.

人間にとつてただ一つの試みとは、悪との触れ合いの中たったひとりで放つておかれることである、とヴェイユは言う。我々はおそれつつ、祈る。

«Et ne nous jette pas dans l'épreuve, mais protège-nous du mal». (AD 226)

「われらを試みにあわせず、悪より守りたまへ」。

キリストでさえおそれ、祈った。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」(マタイ二六・三九)。だが、キリストの十字架に思いを致すとき、我々は一層おそろしくなってしまうかもしれない。罪なきキリストが不合理に被った悪に対してさえも、神は沈黙したままであつたからだ。いったい神は、十字架上のキリストの何を悪より守つたのだらうか。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになつたのですか」(マタイ二七・四六、マルコ一五・三四)。純粹な人々にこう叫ばせるような悲慘を、ヴェイユは「不幸」(malheur)と呼ぶ。なぜこの私には今、食べものがないのか、疲労や虐待によつて消耗しきつていいのか、また、近いうちに射殺されなければならなかったり、病氣であつたり、投獄されなければならないのか、不幸の形は人の数だけ、様々である(cfr. PSO 127)。しかし、不幸がいれば「人生の大きな謎 la grande énigme de la vie humaine」(PSO 87)であることに変わりはない。かくも不合理で無差別的でありながらも、ひとたび人を捕えたら最後、逃れることを許さない絶対的暴力だからだ。不幸は、神の教育的はからいといった善用可能なものではなく、どこまでも許されることのない悪でしかない。我々の生きる世界には、因果応報的な神学の入り込む余地などないのである。

ヴェイユは世界に溢れる不幸を見つめることで、罪なき人間が不合理に被るものとしての悪の問題に迫ろうとしている。

「不幸はしばしの間、神を不在にする。死人よりも不在に、真暗闇の独房の中の光よりも不在にするのだ。ある種の恐怖が魂すべてを浸す。この不在の間、愛すべきものは何もない。恐ろしいのは、もし、愛すべきものが何もないこの暗闇の中で、魂が愛することをやめてしまうならば、神の不在が決定的になってしまうことである」。(PSO 89)

ここでヴェイユは、被る悪をめぐる三つの問題を指摘している。まず、悪が「不幸」として、まったく罪なき人々に降りかかる可能性が十分考えられることだ。さらには、そういった状況に陥った人間が、神の不在、つまり、自己と神との間に隔たりを痛感せざるをえないこと、そして、その神から離れているという事実が人間に恐怖を覚えさせることである。悪は、人間の脆さを白日のもとにさらす。怯えつつ「悪より守りたまえ」と叫ぶ人間の何を、神は守るのだろうか。それは単に、我々の生活から、苦悩の直接的原因となる悪を取り除くということではあるまい。キリストの十字架がこれを否定している。ならばなぜ、人は祈るのか。祈りとは何であるのか。この根源的問いに、シモーヌ・ヴェイユを通して迫ってみたい。

二 神の不在と人間の悲慘

人が何かを祈るとき、様々な形こそあれ、それを聞きたもう神の存在が前提されている。祈る人間は、今ここで自分と共に在り、この自分を受けとめ支えることのできる超越の存在を信じている、あるいは信じようとしているのである。祈りはいわば、「インマヌエル（神は我々と共におられる）」（マタイ・二三）の信仰告白であるのだ。しかし、ヴェイユは祈ることを意識的に遠ざけるよう心掛けていた。ヴェイユにはただ一つ、晩年の雑記帳に「祈りの一例」(Example de prière)と題された断片があるだけだ。これはヴェイユ自身の言葉で書き残された、唯一の祈りであるといえよう。だが、恐ろしい祈りなのである。

「父よ、キリストの御名によつて、このことを私にお与え下さい。」

全身不随の麻痺者のように、体の動きは何ひとつ、どんなかすかな動きでさえも、私の意のままにはならない状態にして下さい。全く盲目で耳も聞こえずその他の三つの感覚も奪われた者のように、何も感じられないようにして下さい。計算もできず文字も読めないばかりか、しゃべることさえついには習得できなかった全くの白痴のように、どんなに簡単な思考であらうと、二つの思考を、なんとも頼りない脈絡で結びつけることさえできないようにして下さい。すっかりもうろくした老廃者のように、どんな苦しみや欲びをも感じられず、いかなる人やもの、この自分自身をも愛することができないようにして下さい」。(CS 204)

祈るとき我々は、悪から自己が守られることを神に願う。しかし、ヴェイユの祈りが求め、哀願する人間の姿は、神の守りから程遠い。まさに、すべての力を奪われ、悪の中で傷つき血を流す、むきだしにされた孤独な生にほかならない。祈るとき、ヴェイユはこの世における神の不在をも前提としているのだ。だが、体の動き・感覚、思考の動き・感情、そして愛さえも含むすべての人間的な力を奪われた存在など、もはや人間ではなく、「もの」だ。我がヴェイユの祈りに恐怖を覚えるのは、一人の生ける人間が一個の「もの」になりゆく過程を、この祈りに透かし見るからなのである。時に運命は、財産、社会的名声、心身の自由・健康、他者からの愛など、「私」の持てるものを容赦なく奪い去る。「私」のものだと叫びつつ追いつがるも空しく、運命の暴力の前に、我々はただ物質のごとく服従を迫られるのだ。人間は「私」(moi)を否定され、無力な「もの」と化してしまうことを最も恐れている。まだ生きながら、魂を持ちながら「もの」であることは異様なのである。苦悶のためにどれほど身をよじれども、この屈辱的な状態に順応することなど人間にできはしない。そのような時にこそ、我々は神の守りを求めて祈るのではないだろうか。

「ローマ人、ヘブライ人どちらもが、自分たちは人間の共通の悲惨から免れているのだと信じていた。前者は運命によって世界の支配者たるべく選ばれた国民として、後者は彼らの神の特別な恩恵によって、しかも、彼らが神々に従順である度合いに正確に応じて、免れていると信じていたのである」。(5641)

しかし、運命から庇護されて存在するものなどにひとつないのだと、ヴェイユは断言している。信仰者においてでさえも、暴力的な現実には何らかわりはないのだという。ヴェイユにとって、神はこの世界において不在なのであ

る。我々が祈れども、神はこの世の不幸そのものを取り除きはしない。神は世界の創造者でありながらも、世界の支配者ではありえないからだ、ヴェイユは認識している。この世界において我々を真に支配するのは運命、すなわち、世界の「必然性」なのである。

「我々を存在させている神の創造主としての愛は、単にあり余るほどの寛大であるだけではない。その愛はまた、放棄、自己犠牲でもある。受難だけでなく、また、創造そのものが神の側からの放棄、犠牲なのである。受難は放棄と犠牲の完成にはかならない。すでに創造主として神は自らの神性を空しくしている。神は奴隷の姿をしている。神は必然性(necessité)に服従している。神は自らを低くしている。神の愛は、神以外の存在、善以外のもの、つまらぬ存在を、自由で自律的な在り方で存在させている。愛によって、神はそれらの存在を不幸や罪にゆだねる。なぜなら、もし神がそういった存在をゆだねないのならば、それらは存在しえないことになるからである。神が現れるならば、炎が蝶を焼き殺すように、それらは存在を取り上げられてしまうであらう」。(PSO 35)

世界創造は、神が自己の意志を思いのままに行使し自己の権力を及ぼしうる範囲を拡大するためになした、神のための営みではない。むしろ創造は、自ら完全性という神性を脱ぎ捨て、神の外に不完全で卑小な存在が自由に在ることをも許す、被造物のための、神による力の諦めなのである。被造物の自由を愛するがゆえに、神はこの世を支配することから退き、一被造物である必然性に世界をゆだね、あえて不在であろうとしているのである。創造後の神の不在は、自らを犠牲にしてまで我々を生かそうとする神の愛なのだ。しかし、神が不在であるからこそ、世界

は不幸や罪の可能性にさらされている。

世界の真の支配者である必然性は、時にやさしく人間を包むが、突然、容赦なく不幸へ引き込みもする。だが、そこには何の理由もない。海が船を沈没させまいと波の動きを変えることなどありえないように、必然性は人を選びもしないし、また、意志も目的も持たない。盲目的なメカニズムだからだ。にもかかわらず、必然性は例外なくすべての人間を服従させる絶対的な力なのである。したがって、人間の共通の悲慘とは、転変きわまりない運命、必然性が人間の魂すべてをその従属下に置き、生ける「もの」に変えてしまうような悲慘、必然性を前にした人間の脆さなのである。神でさえも我々をこの悲慘から守りえないのだ。そして、人間共通の悲慘の具体的現実にはヴェイユが与えた名こそ、「不幸」なのである。

ヴェイユが祈りを通して見つめようとしているもの、それは、神なきこの世界で必然性の暴力にすべての力を奪われ、生ける「もの」と化した人間の姿だ。神に見捨てられた十字架上のキリスト、義人ヨブの姿とも重なる。このような耐えがたい悲慘を、ヴェイユはなぜ、あえて、願ひ求めようとするのであるのか。普通、服従させられるだけの無力な「もの」になどなりさがりたくない、自由意志 (libre arbitre) を行使する「私」であり続けたい、との願ひが神への祈りとして捧げられるのではないだろうか。しかし、必然性が奪おうとする「私」を守りたいがために祈ることは、神への背反なのである。ここに、ヴェイユがかつて祈ることを日常的に避けていた理由がある。

「我々は、この世では何ひとつ所有していない、偶然がすべてを奪い去ってしまうこともありうるのだから。ただ、《私が》(Je) と言いうる力は別だが、この力をこそ、神に捧げなければならない。つまり、この力を滅ぼさねばならないのだ。我々に許された自由な行為など、全く一つもない。ただ、この《私が》を滅ぼすこと以

外は」。(PG 29)

必然性の暴力に触れ、人間は「もの」に変えられてしまう。我々はそう思い込んでいるが、実は、はじめから人間は「もの」なのである。我々の肉体は脆く、ほんのひとかけの物質によっても引き裂かれ、永久に狂わされうるし、魂も傷つきやすく、周囲の気まぐれな物事や人に情けないほど依存している (cf. PSO 108-109)。我々が「私」であると信じているものは、必然性のなすがままになっている自動力のない物質にすぎないのである。

創造が、卑小な我々をも自由に存在させるための神の自己犠牲的愛である以上、人間への自由意志の贈与こそが神の創造にほかならない。だが、ヴェイユは、この与えられた力をこそ、我々自身の手で滅ぼすべきだと考えている。なぜ神は、捨て去られるべき自由意志をあえて人間に与え、神の外に存在を許したのだろうか。

「神は自らの神性を脱ぎ捨てて空しくなり、我々を偽りの神性で満たした。我々も、偽りの神性を脱ぎ捨てて空しくなろう。この行為が、我々を創造した行為の究極目的なのだ。

今この瞬間も、神は創造の意志によって私を存在の中に保ちつつけている。私が存在を放棄できるように」と。(CS 91)

神にとっての自己犠牲とは、自分は存在していると思ひ込むことを人間に許すことである。これが、神の愛だ。逆に、人間にとっての犠牲とは、自分は存在しないということを認めることでしかない。神への愛だ。この自己犠牲的な愛の往復が、創造とその究極目的なのである。つまり、神は、人間が自発的に自由意志を返却することを期待

して与えたのだ。神はただ黙し、乞食のように空しく待ち望んでいる。力による強制は何もない。ここで願われるのは愛であるからだ。ヴェイユの理解によれば、自由意志が父から放蕩息子に分け与えられた財産であり、創造における「私の分け前をください」（ルカ二五・一二）の要求が原罪なのである（cf. CS 168）。創造において与えられた「私が」と言いうる力、自由意志を愛の応答として神へと返却し、再び神の内に帰ることを、それゆえヴェイユは「脱創造」（détournement）と表現するのだ。

三 不幸の認識から共苦へ

ヴェイユの「祈り」には、つづきがある。人間の悲慘を注視することから始まったこの祈りは、最終的にどこへ向かうのだろうか。

「父よ、キリストの御名によって、このことのすべてを現実、私にお与え下さい。この肉体が実にしなやかに動こうと、まったく硬直しきって動くまいと、つねにあなたの御心になつてでありますように。この聴覚、この視覚、この味覚、この嗅覚、この触覚が、あなたの創造のまさしく確かなしるしを受けとることができまうように。この知性が全き明晰さをもって、すべての思考をあなたの真理と完全に一致させつつ、つないでいくことができますように。この感受性が、可能な限り最大限の烈しさと純粹さをもって、苦痛と歎びのあらゆるニュアンスを感じとることができまうように。この愛が、ご自身に対する神の愛と同じ、すべてを焼き尽くす炎となりますように。このすべてが、私からもぎ取られ、神の内で焼き尽くされ、キリストの実体に変えら

れ、肉体も魂もあらゆる種類の糧を欠いている不幸な人々に食物として与えられますように。そしてこの私は、盲目で耳も聞こえず白痴でもうろくしきつた麻痺者でありますように。

父よ、今こそ、キリストの御名によって、この変化をおこなって下さい。不完全な信仰をもって願い求めておられますけれども、完全な信仰をもって願い求められたかのように、この願いをお聞き入れ下さい。

父よ、あなたは至高の善 (the Good) であり、私は取るに足らぬ者でありますゆえ、この肉体と魂を私からもぎ取り、あなたに属する「もの」(things) にして下さい。そして、私の中で残るものは、永遠に、この剝奪そのものか、無だけでありますように」。(CS 204-205)

すでに引用した前半部分との比較を試みよう。前半で、祈りを通してヴェイユが見つめるのは、人間の悲慘であった。創造において神が与えた偽りの神性、自由意志・「私」を脱ぎ捨て、人間本来のあるべき姿、すなわち、自動力のない「もの」に徹しようと願っている。さらに後半では、「御心になう」・「あなた」の「もの」へと、神が原動力であるような「もの」へと変えられることを願い求めている。前半は、「もの」に変えられることへの願いではなく、人間がもとも「もの」であることの認識を我々において確かにしてほしい、という願いだといえる。肉体における動き・感覚だけでなく魂における思考・感情のすべてまでもが、実は、まったく周囲の状況のなすがままになっている人間の悲慘を認めることを、ヴェイユはまた、「不幸の認識」(PSO II 3)とも表現している。したがって、前半では「何も感じられないように」と祈っているにもかかわらず、後半で「苦痛と飲みのあらゆるニュアンスを感じることができますように」と逆転しているのも、不思議ではない。行為の原動力自体が一変しているからだ。後半においては、滅ぼされるべき偽原動力の「私」はすでに、神への愛の炎によって焼き尽くされ、神そのものに

場所を明け渡しているからである。この世界に不在の神が、原動力というかたちで我々と共に在る。これが、ヴェイユの祈りにおけるインマヌエルである。

注目すべきは、焼き尽くす捧げものとして「私」から神へと返却された肉体と魂が、不幸な人々の糧となるように、ヴェイユが祈るに至っていることである。つまり、ヴェイユの祈りは不幸の認識からはじまり、共苦(compassion)へと向かっているのだ。必然性に翻弄される人間の悲惨を知ることが、なぜ、他者を憐れみ、苦しみを共に分かち合うことにつながるのであらうか。

しかし実際、我々にとって、他者への共苦ほど困難なものはない。「それは、生きることが楽しい子供にとって自殺することが難しいという以上に、困難なことなのだ」(P. 109)。明日の希望を奪われ、現在の苦悩の一点に釘付けにされつつも生きることを余儀なくされた不幸な人々は、いわば、「生きたままビンでアルバムに留められた蝶」(P. 106)、「半分つぶされた虫」(P. 88)だ。もがき苦しむ「形のくずれてしまった生」(P. 111)を直視することは、切断された手足の切り口を見せつけられるように、感受性にとって、何にもまして耐えられない苦痛なのである。ひたすら生を望む我々にとって不幸は、近づくことを避けたい、死以上に残酷で恐ろしいものなのだ。そのために、しばしば人は無意識に、不幸にとりつかれた人々をさげすんでしまう。なぜか、「我々の理性が罪(crime)に結びつけているあらゆる軽蔑、嫌悪、憎悪を、我々の感受性は不幸に結びつけてしまう」(P. 90)のである。不幸に触れた人間が、不幸の内に、こうした身震いするような罪と穢れを感じてしまうこと、それが我々の感受性の悪しき法則なのである。この感受性が、他者への共苦を妨げているのだ。不幸に神の怒りと罪のしるしを認めようとするならば、共苦はもはや絶望的となる。

だが、一人の例外もなく、地上に生きる誰もが無力な「もの」として必然性の暴力に引きまわされていると感じ

られるならばどうだろう。限りなく純粹で貴重なものも、無垢な人々のつかの間の幸福さえも、すべてがこの世では守られることなく、必然性の力の前に、同じように、むきだしのまま滅びにさらされると痛感しているならば、どうだろうか。その事実を見つめるとき、不幸な人々と我々を隔てているのは、ほんのわずかな偶然だけと氣付くはずだ。ヴェイユのいう不幸の認識は、この偶然性に目を向けさせるものなのである。神は、善人にも悪人にも雨を降らせ太陽を昇らせるように、必然性の力を通して、不幸をもすべての人間に分け隔てなく与える (cf. Ps. 135)。したがって、その重みには無限の差異があるにせよ、不幸に捕らえられるのも、夕立に遭うのと同じ（偶然的な）不運であることに変わりはない。不幸を被る人間に罪などないのだ。それにもかかわらず我々は、罪とは無縁なはずの不幸を、何か穢れたもののように忌み嫌っていたのである。神の守りなき人間の悲惨を認識することによってしか、不幸と罪の不当な結びつきは解かれえない。それゆえに、不幸の認識を通過せずして、愛することも義しくあることもできないのだ。

四 共苦の源泉

ヴェイユの祈りは、「私」に注がれる神の愛と守りを願う一般的な祈りの対極に位置する。神から愛されるとは、この世の悪から「私」が守られることではない。「私」は神から盗みとった偽りの力であり、本来、我々は悲惨な「もの」でしかないからだ。

「我々の内にあつて愛されるに値するもの、それは、魂の創造されざる部分、神の御子と同一の部分である。様

様な属性からなる「私」が破壊され、この部分が現れるとき、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」⁽⁵⁾。(CS 248)

神の愛とは、その無力で惨めな「もの」にキリストという原動力⁽⁶⁾を吹き込むことで、共苦の愛を抱く「もの」、キリストの憐れみを不幸な他者に伝える「もの」と変えることなのである。ヴェイユが祈りの中で願う、不幸な人々の糧となる「キリストの実体」とは、まさしく、キリストの憐れみなのだ。食欲にひたすら愛を受けようとする「私」を拒否し、逆に、他者に降り注ぐキリストの愛に変えられることへの願い、これがヴェイユの祈りなのである。

したがって、憐れみは人間的でありえない。神にのみふさわしい属性だ。人間の魂の内なるキリストこそ、共苦の源泉だからである。このインマヌエルの確信により、ヴェイユが人間の魂を二つの部分から成るものとして捉えていることが分かる。創造された部分と創造されざる部分である。被造物である人間の魂の内には、創造されざる超自然的部分が存在している。

「神は我々の全存在、肉も、血も、感受性も、知性も、愛も、物質の冷酷な必然性に、悪魔的な残忍さにゆだねる。ただし、魂の永遠で超自然的な部分だけは別だ。

創造は放棄である。自分以外のものを創造したとき、神はこれを必然的に放棄した。創造において神は、ただ、神自身にほかならぬもの、すべての被造物の内の創造されざる部分だけは自分の保護下に残しておいた。それは命であり、光であり、言である。それは、この世での神のひとり子の現前である」。(CS 49)

人間の魂の内にはたった一部分だけ、この世の不幸、必然性の暴力から守られているものがある。それは、人間の命の源泉だ。我々と共に在り我々の生を支える、神そのものののだ。たとえ我々がそれを認めなくとも、不在の愛によつて人間を自由に存在させる仕方、神はすべての人間を生かす源泉として共に在る。世界のどんな暴力も、この事実を変えることはできない。神への信仰の有無さえも問題にならないのだ。だが、どれだけ多くの人間の内で、この命の源泉の上に不当にも「私」が貼り付けられていることだろう。真の命の源泉は「私」の下に埋もれて見えないのだ。しかし、偽の源泉、原動力である「私」が崩れ去るやいなや、命の源泉は、他者への限りない憐れみが湧き出る、共苦の源泉としても輝きはじめる。一人の人間という被造物の中に見出された命の源泉は、同時に、すべての存在の源泉だからである。同じ命に生かされ存在しているのだと知るとき、愛さずにはいられなくなるのだ。

だが実際、愛したいと願えども、愛することは難しい。愛そうと不幸な人々に近づいたとしても、恐怖やどうしようもない嫌悪が憐憫の情に混入してしまいがちだ。

「不幸な人を前にして共苦を抱くには、魂が二分していなければならない。『不幸の』どんな感染からも、どんな感染の危険からも完全に守られている部分。そして、『不幸な人と』同一化するまでに染まってしまう部分である。この『二つの部分の』緊張が受難 (passion)、すなわち、共に受難を被ること、共苦 (comm-passion) なのだ。」 (CS 42)

凄惨な不幸にも動揺せず、身の危険も省みず人々に駆け寄り、苦しみを共にしうる人間の強さは、魂の内なるキリ

ストが支えている。つまり、インマヌエルこそ、我々の強さだ。人間から溢れるように見える憐れみは、ひとつの肉体を媒介に神から苦しむ存在へ注がれる、キリストの憐れみなのである。ならば、不幸の責め苦につねにさらされ、傷つき怯える我々の魂の脆さは憎むべきものであろうか。この脆さ、弱ささえなければ、人間はより憐れみ深くあれるのだろうか。いや、まったく逆だ。不幸のもたらす苦しみを、痛みを、みじめさを、悲しみを傷として知りつくしている部分が魂の内にあるがゆえに、不幸な人と同一化するまでに苦しみを共に分かつことが可能となるのだ。ヴェイユはこの箇所を次のように言い換えている。

「魂の霊的な部分はすべて神の内に移り住み、魂の肉的部分は裸で、着物も鎧も身に着けず、あらゆる打撃にさらされているのでなければ、共苦を抱くことなどありえない。この裸性 (nudité) のおかげで、不幸な人がただそこにいるだけで、不幸の可能性が感じられるようになる」。(CS 40)

神の不在ゆえ、守りなきまま悪にさらされ、この世界でひとり生きる人間は脆い。共苦を抱く際、人間の内には超自然的な強さが生まれる一方、脆さもそのまま残されている。インマヌエルに支えられた強さと神の不在ゆえの脆さの間で、その緊張の只中で、我々は人を、そして神を愛するのである。

五 結び——力の彼方に

この世界においてどこまでも、神と人間のあいだには荒々しい必然性が挟まっており、無限の隔たりをなしてい

る。不幸のさなか、人間のいかなる努力によっても、神の守りをこちらに引き寄せることはできない。十字架上のキリストは死んだ。力はこの隔たりを越えて行けないのだ。神が我々に、またこの世界に力を及ぼすことを期待してはならない。力が届かない程までに、不在となるまでに、神は我々から遠ざかっているのである。ならば、いたい何がこの隔たりを越えてゆき、ついには神に至るのであるか。神は何を、我々に持ち望んでいるのだろうか。

「私がついに神を愛することに同意するのを、神は忍耐つよく待ちつつける。立ったまま、動かず、黙って、パンをひとかけら恵んでくれそうな人の前にたたずむ乞食のように、神は待ちつつける。時間とはこの待望である。」

時間とは、我々の愛を乞い求める神の待望なのだ。

星々も、山も、海も、時間を語るものみなが、我々に、神の哀願を伝えてくる。

待つときの謙虚さは、我々を神に似たものにする。

神は善でしかない。だから、神はそこにたたずみ、黙って待ちつつける。進み出たり、語りかけたりする者は、わずかなりとも力を行使しているのである。ただ善でしかない神は、そこに在りつつけるだけだ。

恥じらいを知る乞食は、神のイマージュである」。(CS 91)

力と最も無縁なもの、強制によつては決して生まれえないもの、それは、愛である。神は、人間の愛を待ち望むがゆえに、あえて力であることを放棄し、力の彼方に遠ざかる。そして、人間の前に愛を乞う「乞食」でありつつける。時間と空間の総体、すなわち、必然性の世界に遮られた、神と人間のあいだの隔たりであれ、「生きることが楽

しい」我々と不幸な他者とのあいだの深淵であれ、無限の隔たりを突きぬけるのは、ただこの愛でしかないのだ。

力は隔たりを越えてはゆけない。神が不在のこの世で、人間に求められる関係は愛でしかないのである。キリストは飢え、乾き、疲れきっていた。「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになつたのですか」と十字架上で叫んだとき、キリストはもはや、自分の内に何か喪失感のようなものしか見出さなかつたかもしれない。だが、あれほどの喪失感の中で、最後にもう一度、神に向かつて語りかけずにはいられなかつたのは、キリストが神を、やはり愛していたからなのだ。この十字架上の事実こそ、力には越えられぬ人間と神のあいだの無限の隔たりを、愛がはるか越えていった証なのである。キリストの祈りを聞き入れ、神が守つた唯一のもの、それがこの愛なのだ。神への愛があるかぎり、神が不在の世界において、人は神と共に在るのである。

祈りは、我々の思うままに神を動かすことのできるような「力」ではない。この確信がヴェイユの祈り全体を貫いている。

「神には感謝、すべての被造物に共苦を。

神には讃美、すべての被造物に憐れみ (misericorde) を。

被造物は憐れみ以外の正当な愛の対象となりえない。

神もまた、讃美以外の愛の対象ではありえない。

われらの悲惨は、神の栄光の讃美である」。(CS 48)

ヴェイユにとって祈りとは、人間の悲惨を通して神を讃美することにほかならない。つまり、祈りとは、まず、必

然性の世界における人間の無力、脆さを認識し、自らを「もの」であると告白することである。さらには、ただの「もの」ではなく、神に属する「もの」、すなわち、キリストに動かされるような、共苦の愛をすべての人々に抱くことのできる存在へと変えられることへの願いなのである。我々が憐れみを欠き、共苦の愛を他者に抱けなくなる時、その人々を神から引き離してしまうことになる。我々は、人々と神のあいだに挟まり、キリストの憐れみを遮る障壁となってしまうているのだ。天から注ぐ光をただ通す透明なガラスのように、人間は神の愛を通す「もの」であらねばならない。それゆえに、どこまでも「もの」である人間の悲慘が、かえって神への讚美となるのである。共苦の愛を抱く人の内にインマヌエルを確信し、不幸の内で神の不在に触れる。人間は強く、そして脆い。

「星々と花ざかりの果樹。どこまでも永久に変わらぬものと、このうえなく脆くはかないものは、どちらも永遠を感じさせる」。(PG 124)

ヴェイユがこよなく愛したきらめく星と散りゆく花に思いを致すとき、人間の内包する強さと脆さに重なる。我々人間の内の、そして、十字架上のキリストの内なる星と花、神と共に在る強さと、不在の中の守りなき脆さ、どちらも永遠を映している。これら二つは、いずれも欠くことのできぬ共苦の源泉、すなわち、これまでも、そしてこれからもすべての存在に絶え間なく注がれつつける、神の永遠の愛の源泉だからなのだ。この強さと脆さを抱きしめつつ、われらは生きるのである。

ヴェイユの著作からの引用は、下記の略記号・頁数と共に引用文尾に示す。
引用文中の「」は筆者による文意の補足である。

AD: *Attente de Dieu*, Librairie Arthème Fayard, 1966.

CS: *La Connaissance surnaturelle*, Gallimard, coll. «Esprit», 1950.

EL: *Écrits de Londres et dernières lettres*, Gallimard, coll. «Esprit», 1957.

PG: *La Pesanteur et la grâce*, Librairie Plon, coll. «L'Épi», 1947.

PSO: *Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu*, Gallimard, coll. «Esprit», 1962.

SG: *La Source grecque*, Gallimard, coll. «Esprit», 1963.

(1) ヴェイユによるギリシア語テキストの自由訳と注釈である。A propos du «Pater» 「主の祈りについて」参照。

(2) 「昨年の九月までは、私の生涯において、少なくとも言葉の文字通りの意味において、祈るということとは、ただ一度さえもありませんでした。神に向かって、声に出して、あるいは心のなかで言葉をかけたことはなかったのです」(AD 47)。ヴェイユは *Autobiographie spirituelle* 「精神的自叙伝」において以上のように告白している。初めての祈りは、マルセイユにて、一九四一年九月一五日頃であった。「主の祈り」の暗誦を通し、キリストの臨在に触れたのだという。Simone Pétrement, *La vie de Simone Weil*, Fayard, 1997, p.586 参照。なお、ヴェイユとカトリシズムとの三度の接触について、富原眞弓氏の論文「シモーヌ・ヴェイユのイタリア 戯曲『救われたヴェネチア』——もしくは『憐れみ』の悲劇」(『現代思想』vol.23-6、八〇—八三頁)が参考になった。氏は、ヴェイユのポルトガル、アシジ、ソレムの三体験は共通に、純粹なもの、真なるもの、美しいものが、「力」との接触によつてつねに穢れや滅びの危

険にさらされている事実を我々に感じさせる、と述べている。それらの本質的な傷つきやすさが、我々に憐れみを惹きおこす。本論文では、憐れみを抱く主体側の脆さに注目しているが、憐れみの対象の脆さを見つめることも、ヴェイユにおける共苦を考える上で、欠くことのできない側面なのである。

- (3) 一九四二年五月一日、ナチス・ドイツ占領下のフランスでのユダヤ人迫害を逃れるため、ヴェイユはマルセイユよりアメリカへ渡る。この「祈りの一例」は、同年一月一〇日ロンドンの対独レジスタンス運動に加わるためアメリカを去るまで書かれた「アメリカ・ノート」の中の一断片である。比較的最近のもので「祈りの一例」を扱っているものに「Joan Dargan, *Simone Weil Thinking Poetically*, State University of New York Press, 1999 がある。『The Terrible Prayer』では、この祈りの中にヴェイユの自我の残骸を見出し、批判の対象としている。本論文とは興味深いまでに対極的な見解を示すものであるため、参考にあげておく。

- (4) 八木誠一氏は、マタイ五・四五の持つ陰の面、不幸が人間を襲う際には善人か悪人かによらないという点を指摘し、この言葉を「不気味な言葉」と表現している。『パウロ・親鸞キイエス・禅』（法蔵館、二〇〇〇年）二二〇頁。

- (5) ガラテヤ二・二〇。

- (6) « Note pain, celui qui est surmaturel, donne-le - nous aujourd'hui » (AD 220). 「われらのパン、超自然的なパンを、今日もわれらに与えたまえ」。

一般的に「必要な」・「日々の」と訳される *epiousios* を「超自然的」と解釈することで、ヴェイユは我々の行為の糧が、超自然的パン、すなわちキリストという原動力であることを示している。Cf. *Pétrement, op.cit.*, p.563. この超自然的パンは、日々のパンとは異なり、我々が求めるならば必ず与えられるパンであるとヴェイユは確信していた。Cf. AD 39. この確信こそが、まさにヴェイユの信仰である。Cf. CS 87.